九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

顧炎武の詩における自己表出と自我の形象化

藤井, 良雄
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9780

出版情報：中国文学論集. 8, pp.78-116, 1979-09-30. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

顧炎武の詩における自己表出と自我の形象化

藤井　良雄

一

顧炎武、明末萬曆四十一年（一六一三）に生れ、清初康熙二十一年（一六八二）、六十九歳を以て沒す。清朝考證學の開祖と稱せられる學者であり、また「祖國十二詩人」[1]の一人として現在に到るまでなお尊ばれる詩人でもある。

學者としての顧炎武については、すでに同時代から多く論ぜられてきたが、梁啓超が『清代學術概論』で「開祖としての名に價しうるのは、いかなる點にあるだろうか。すなわち、研究方法を確立しえたという點にこそある。」[2]と評價して以來、その地位は定まったといえよう。梁啓超が顧炎武の學問に關して指摘したのは、「貴創」（獨創を貴んだこと）・「博證」（博く證據をあつめること）・「致用」（實踐に役だたせること）の三點である。このうち「致用」の點は、後述するように、明末清初の「經世致用」を標榜する學風の共通點であり、顧炎武だけの特徵とは言えない。また「博證」の點では、梁啓超が「このような方法は、いずれも近世の科學的研究方法であり、乾隆・嘉

慶以降の學者が當然學んだところであったが、當時にあっては、むろん顧炎武の獨創であった。」と述べているごとく、研究方法として「博證」を顧炎武が身に付けていたことは、彼の獨創を貴ぶ「貴創」の精神に由來するとみることができる。彼の「博證」の內實については、『四庫全書總目提要』の「日知錄」の條に、「顧炎武の學問には根底がある。博くゆたかでありながら、論理がよく一貫している。一問題ごとに詳しく歷史を研究し、證據をあげてのち、これを書物に著わす。したがって、多くの證據を引用しながら、たがいに抵觸することが少ないのである。[3]」という。この評價は、恐らく同時代の考證學者たちの共通するところであったと思われる。

さて、顧炎武の學問について特徵的とみなされるものは「貴創」の精神であると考えてよい。顧炎武自身もその點を自覺していたようで[4]、自分の信念としたものであった。彼は「初刻日知錄自序」において、わざわざ自著の「與人書十」を引いて次のごとく述べる。

> 嘗に謂へらく今人纂輯の書、正に今人の錢を鑄するが如し。古人は銅を山より采るも、今人は則ち舊錢を買ひ、之を名づけて廢銅と曰ひ、以て鑄に充つるのみ。鑄する所の錢は、既已に麤惡にして、又將に古人傳世の寶を舂剉碎散し、後に存せざらしめんとするは、豈に之を兩失せざらんや。「日知錄又幾卷を成す。蓋し之を期するに廢銅を以てせんか。」と問ふを承く。而れども、某別れてよりこのかた一載なるに、早夜誦讀し、反復尋究して、僅かに十餘條を得。然れども山より采るの銅に庶幾し。

この言葉を讀めば、すでに狩野直喜が言ったごとく「炎武は日知錄のオリジナルといふ點で如何に自信を持って居たかがわかると共に、彼れの著作に對する精神も窺ひ得る。[5]」のであり、顧炎武が著述における獨創性を自覺し

ていたことが了解できる。

ところで、顧炎武の詩は『顧亭林詩文集』に集められており、總數四百二十六首である。すべて一六四四年明朝滅亡時以後の詩作を收錄して、それ以前の詩作は、顧炎武が意圖的に破棄したと思われる。一六八二年彼は沒したのであるから、現存する詩四百二十六首は、彼の後半生の詩ばかりということになる。從って、顧炎武は、『日知錄』の著述の場合のみならず、詩作の面においても「一歲の間僅かに十餘詩に過ぎない」ことが推知される。亂作はしなかったのである。

從來、詩人としての顧炎武は、「愛國詩人」(6)という評語が與えられてきた。また辛亥革命前後には、革命派知識人や淸朝遺老たちが、それぞれ全く異なる方向から顧炎武の詩に對して並並ならぬ愛好を示した。(7) しかし、それは殘存する顧亭林詩の表現を恣意的に受け取った愛好の仕方であった。讀者自身の身上に卽した讀み方で主觀的なものとなり、いわば亭林詩の外周を歷覽しているようなものであったといえる。本稿においては、まず顧炎武が文學表現上いかなるオリジナルを主張したかを確認し、ついで彼が自作の詩のなかで、その文學的主張をいかに實踐しえたかという問題に着眼して論を進める。そして、「詩は必ずしも人々皆は作らず」と主張した顧炎武が、詩として表現せざるをえなかったものは何かを探ろうとする。そのために、論者は、この詩人がことばとして彼自身の獨自な表現に辿り着く過程、換言すれば、內面から外へ向かう顧炎武の創作精神の方向性を、可能なかぎり論究してみようと思う。

二

明末清初は「天崩れ地解ける」と言われる狂瀾怒濤の時代であった。明末の腐敗した政治と年ごとに起きる天災とによって、農民の生活は破壊され、そのために各地で叛亂が起った。叛亂軍の中で最も強盛となったのが、李自成と張獻忠であり、その李自成軍によって明朝は滅ぼされた。しかし、李自成軍は、この機に乘じて侵入して來た滿清を防ぐことができず、以後、滿州族という異民族による中國支配の時代が到來する。かかる危機の時代、士大夫の學問・思想には一般的にどのような特徴があらわれたのか。一九六四年度日本中國學會研究討論會テーマ「思想史における明末清初」の一覽表(8)（山井湧氏作成）によれば、明代の心學（十五・六世紀）、清朝の考證學（十八・九世紀）に對して、この明末清初の學問には「經世致用の學」（十七世紀）の名を與え、その特色として以下の十ケ條を列擧している。一（目的主眼）　經世致用（實學）、二（內容）　政治論（經學・史學）、三（基礎方法）　讀書・博學・實證・政治的活動、四（關心の所在）　社會・政治の現狀　その改善「人格的修養の要素減少」、五　外的社會の重要性を認識、六　客觀主義（實證的）、七　經書を尊重、八　民主主義（情欲肯定）、九　名敎尊重、十　氣の哲學、以上である。

ここで列擧されている性質は、康熙の初年（一六六二）までに成年に達した世代の文人に、おおよそ共通するものであるが、これら明末清初の所謂「經世致用の學」の特色を備えた人物としては、當然「明の遺臣」と稱せられる人々と、とりわけ「三大師」と呼ばれた黃宗羲・顧炎武・王夫之が擧げられる。そのうち顧炎武に關しては、佐

藤一郎氏がその論稿「清の詩文」[9]において、各文學史にも登場する人物中、右に列擧された要件を滿たす人物として彼を擧げ、かつ彼を散文作家と性格づけて論じている。今これを、私なりに要約して引用することにしたい。佐藤氏は『日知錄』中の「文は須らく天下に益有るべし」「文人摹倣の病」「詩は必ずしも人々皆は作らず」の四篇は重要であると主張して、「これらは無用の文章を排し、摹倣を退けており、その功利主義的文學觀をよく示している。」と述べ、また顧炎武の次の二文を引用している。

君子の學を爲すは、道を明らかにするを以てなり、世を救ふを以てなり。徒らに詩文を以てするのみならば、所謂雕蟲篆刻にして、亦た何ぞ益あらんや。（與人書二十五）

僕一たび此の言を讀みてより、便ち應酬の文學を絶てり。其の器識を養ひて文人に墮ちざる所以なり。（與人書十八）

この顧炎武の發言を裏付けるかのように、顧炎武の文集中には「壽序」もなく、墓誌銘の數も少ないと指摘する佐藤氏は、最後に彼の文章の特色を要約して、「以上の主張の實踐として、かれの文章には、文學的な技巧に憂身をやつしている跡は見られない。譬喩も隱喩はほとんどなく直喩ばかりである。その直喩の數も少なく、ただちに事實を以て語ろうという態度が濃厚である。中國の文章の主要な技巧に對句的構文があるが、かれも對句を用いてはいるものの、必要以上に多くは用いてはいない。文字の選び方も、めずらしい字や熟語の使用を避けている。だからといって平俗に流れる恐れがないのは、古典と、かれが生きていた時代の事實に對する豐富な知識と洞察が、その文章の內容と表現に奧行きを與えているからである。そしてその背後を流れる救國の情熱が、その文章の格調

を高めている。」と締め括る。以上のごとく、佐藤氏の論考は、顧炎武の散文に關して論じたものであるが、詩作についての發言とみても、顧炎武の文學の性質を究明するものとして大概妥當であると言える。「文須有益於天下」「文人摹仿之病」「詩不必人人皆作」の文章は、顧炎武の文學主張を端的に示すものであり、彼の詩作もその主張に反することはほとんどないからである。後の文人も、例えば崔述（一七四〇―一八一六）が、「余は獨だ顧寧人の言を愛するのみ。詩は當に世に用有るを求むべしと謂ふは、最も風雅の指歸を得たりと爲す。」[10]と述べているごとく、「文は須らく天下に益有るべし」の「文」を「詩」と替えて引用しても、いささかも奇異の感がしないのは、顧炎武の主張が詩文のジャンルを越えた文學のあり方を問題にしたものだからである。佐藤論文では「顧炎武の文集には、明代からあれほど盛んであった壽序もなければ、また墓誌銘の數も亂世の人と思えないほど少ない。」と言及してあるが、確かに、この點は詩作の面でも大方當てはまる。顧炎武の詩は、その十中八九は、天下・國家・時代に題材を採る正統的なもので、世俗の應酬の詩はほとんど存在しない。顧炎武は、詩作においても自分の文學の主張を貫徹させようとしたと言える。

しかし、いかに顧炎武とはいえ、その主張と實作との間に明らかな較差が存在することは、やはり否定できない事實である。また、士大夫にとって、もともと文章が公的な場・外へ向かっての發言であり、これに反して詩が一應私的言語の一面を持っている以上、顧炎武の詩文もやはり同樣であったと言わざるを得ない。確かに顧炎武は、「文は道を明らかにするなり。」といい、「詩は志を言ふ。」と表明したが、實際に詩を作る際には、「詩は性情を主とす。奇巧を貴しとせず。」（『日知錄』卷二十一「古人用韻無過十字」）といい、「詩は情に本づく。」（同卷二十一「詩

題」）と述べて自分の「性情」をこそ重んじているように、彼においても、他の詩人たちと同様、文と詩との間には認識の相違があったとみるべきである。「詩言志」の精神を持した「愛國詩人」顧炎武にしても、祖國を愛するが故にのみ詩作を續けたのではなかった。だとすれば、彼は自分の感情を詩として書かずにはいられなかった詩人であり、リルケのことばを借りて述べれば、彼の詩作、すなわち「藝術作品」は、彼の性情の「必然の結果になるもの」[11]と判斷してよいのではないか。

ところで、『中國文學史』（人民文學出版社一九五八年）の「明末清初民族英雄的愛國主義詩篇」では、顧炎武について次のように締め括る。[12]

顧炎武的一生是戰鬪的一生、他的詩是他在戰鬪中的誓言和悼念故國的歌聲。

顧炎武的文學主張也是進步的。他反對擬摹、重視時代性、主張文章「須有益于天下」、文章要爲政治服務。他自己的文章正是實踐了他的主張的。

ここでは、「彼は摹擬に反對し、時代性を重視して……」と指摘している。顧炎武が摹倣に反對する文學主張を有していたことは已に述べたが、また「時代性を重視」することも「反對批摹」の主張と表裏一體をなすものであろう。『日知錄』卷二十一「詩體代降」の篇で、彼は以下のように主張する。

三百篇の降らざる能はずして楚辭あり。楚辭の降らざる能はずして漢魏あり。漢魏の降らざる能はずして六朝あり。六朝の降らざる能はずして唐あるは、勢なり。一代の體を用ふれば、則ち必ず一代の文に似て、しかる後合格と爲す。

詩文の代々變ずる所以は、變ぜざるを得ざる者有ればなり。一代の文、沿襲已に久しければ、人人皆此の語を道ふべからず。今且に千數百年ならんとす。しかるに猶ほ古人の陳言を取り、一一にして之を摹倣し、是れを以て詩と爲すは可ならんや。故に似ざれば則ち詩たる所以を失ふ。似れば則ち其の我たる所以を失ふ。李杜の詩、獨り唐人に高き所以の者は、其の未だ嘗つて似ずんばあらずして、未だ嘗つて似ざるを以てなり。此れを知る者は與に詩を言ふべきのみ。

明らかに顧炎武は、一方では表現の摹倣に反對し、他の一方では詩文のスタイルと內容の面で時代性を重視している。つまり詩は、時代性に沿って、しかも自分の個性（我）を失なわないことが、彼の詩作の信條であったわけである。そして、顧炎武は、特に詩文における個我の尊重について、「與人書十六」で次のごとく述べている。

初め此の詩を爲るは、賓主一夕の談に具ふるに過ぎざるのみ。後の作者遞ひに相祖襲するは、乃ち壽陵の本步を失する無からんや。海內、能言の士乏しからず、區區として何ぞ相師とするに足らんや。惟だ自ずから己が意を出だし、乃ち敢へて許して知音の者の爲にするのみ。

この篇で、顧炎武が明確に自分の詩作について「惟だ自ずから己が意を」表現することを斷言している。また、「與人書十七」でも、嚴格に詩文における「依傍」に反對して、

君の詩の病は杜有るに在り。君の文の病は韓・歐有るに在り。此の徑を胸中に有せば、便ち終身、依傍の二字を脫せず。斷じて峰に登り極に造ること能はず。

と主張している。

以上の諸篇から判明するように、顧炎武の重視した文學表現における獨創性の要點は、「詩は情に本づく」「詩は性情を主とす」「みずから己が意を出す」ことであって、それが公的には「須らく天下に益有るべし」であったと言えよう。顧炎武にあっては、文學表現が「みずから己が意を出す」ことができるなら、詩文の區別は不要なのであり、「詩は必ずしも人人皆は作らず」と主張する意圖が理解できるのである。

古人の會、君臣朋友、必ずしも人人詩を作らず。人各おの能くする有り、能くせざる有り。詩を作らずとも何ぞ害あらん。若し一人先に倡へて、意已に盡くれば、則ち亦た更續するを庸ふる無し。（「詩不必人人皆作」）

は、そのことを明確に表現することばである。

これを要するに、顧炎武は、その時代を直視し、詩作における「己意」「我」を重視して、みずからの文學の獨創性を發揮することに努めた、卓見の詩人でもあった。

三

顧炎武の『亭林詩集』五卷四百二十六首（亭林外詩補三首を含む）中、その開卷第一の詩が「大行皇帝哀詩」である。この詩の題下には「已下閼逢涒灘」と自注がある。顧亭林詩は編年によって排列され、その年の最初の詩の題下に概ね當該干支を記す。『爾雅』釋天によると、閼逢は甲、涒灘は申を示す。故に「已下閼逢涒灘」とは「以下は甲申（一六四四年）の作である」ことを示し、顧炎武三十二歳の作に當たる。

因みに、清水茂氏は「年をあらわすのに、現王朝の年號を使用せず、干支だけであらわすのは、陶淵明が東晉滅

亡後、劉宋王朝に抵抗の意を示して劉宋の年號を使用しなかった先例があり、顧炎武もそれにならう。[13]」と指摘されるが、顧炎武は「元日」（一六四九）という詩の中で、次のごとく言う。

東夷擾天紀　東夷は天紀を擾し
反以晦爲元　反って晦を以て元と爲す
我今一正之　我今一たび之れを正し
乃見天王春　乃ち天王の春を見ん

この詩句を讀めば、顧炎武が明朝の正朔を守り續けて、決して清朝の正朔を奉じようとしなかったことが判明する。

明の崇禎十七年（一六四四）、北京が李自成軍の手に陷落し、毅宗朱由檢は皇城内の煤山で縊死した（三月）。「大行皇帝」とは、亡くなったばかりで諡を持たない皇帝を呼ぶ。そして、縊死後しばらく經過した五月十五日に、崇禎帝の從兄・福王朱由松が南京で卽位し、ついで六月二十三日、崇禎帝に思宗烈皇帝という諡が上られ公表されることになるのだから、江蘇崑山に住む顧炎武は、皇帝の死が北方から傳わってまもなくこの「哀詩」を作ったのであろう。

神器無中墜　神器　中ばにして墜つること無く
英明乃嗣興　英明　乃ち嗣いで興る
紫蜺迎劍滅　紫蜺　劍を迎えて滅し

丹日御輪升　丹日　輪を御して升る
景命殷王及　景命　殷王に及び
靈符代邸膺　靈符　代邸に膺(あた)る
天威寅降鑑　天威寅(つつし)んで降り鑑み
祖武肅丕承　祖武肅(つつし)んで丕いに承く
釆堊昭王儉　釆堊王の儉を昭らかにし
盤杅象帝兢　盤杅帝の兢なるを象わす
澤能回夏喝　澤は能く夏の喝を回らし
心似涉春冰」　心は春の冰を涉るに似たり
世値頽風運　世は頽風の運に値ひ
人多比德朋　人に比德の朋多し
求官逢碩鼠　官を求むれば碩鼠に逢ひ
馭將失饑鷹　將を馭すれば饑鷹を失す
細柳年年急　細柳年年急に
萑苻歲歲增　萑苻歲歲增す
關門亡鐵牡　關門に鐵牡を失ひ

路寢泄金縢　路寢に金縢を泄らす
霧起昭陽鏡　霧は昭陽の鏡に起こり
風搖甲觀燈　風は甲觀の燈を搖るがす
已占伊水竭　已に伊水の竭くるを占し
眞遘杞天崩」　眞に杞天の崩るるに遘ふ
道否窮仁聖　道は否にして仁聖を窮め
時危恨股肱　時は危うくして股肱を恨む
哀同望帝化　哀は望帝の化に同じく
神想白雲乘　神は白雲に乘るを想ふ
祕讖歸新野　祕讖は新野に歸し
群心望有仍　群心は有仍を望む
小臣王室淚　小臣　王室に淚し
無路哭橋陵」　橋陵を哭するに路無し

この詩は詩題にもあるごとく、「哀詩」つまり崇禎帝の死に對する哀悼を歌ったものである。三段落に分けられるが、第一段は、明王朝が國初以來受け嗣がれて、崇禎帝の御代になったことを述べる。第二段は、明王朝も末期に至って、世の中は時勢が傾き、腐敗がはびこり、「文官は錢を愛して死を怕れず、武官は死を怕れて又錢を要す

る」ありさまを描き、政權の墮落腐敗が明朝顚覆の因であることをいう。第三段は、亡くなった崇禎帝を哀悼しながらも、尙おかつ明朝の回復を希求する。

顧炎武は最終聯に自己を「小臣」として登場させ、そこに自注として、庾信「哀江南賦序」の「哀安の王室を念ふ毎に、自然に涕を流す」を引く。前述したように、この詩は顧炎武三十二歳の時の作であるが、それ以前に詩作が皆無であったとは考えられぬ。以前の詩すべてを破棄して、顧亭林詩中、數少ない五言排律という詩體をとる「大行哀詩」を、自己の詩作の出發點に据えたことは重要な意義を賦與させていると思われる。それは、已に淸水茂氏が述べるごとく「崇禎帝の『哀詩』ではじまる顧炎武の詩は、かれの一生ならびにかれの詩の原點が、統一王朝たる明帝國瓦解にすえられていることを示す。」[14]ということである。この點は、前述の自注と共に、顧炎武が「文須有益於天下」の主張を有し、またその詩作は、失われた明王朝への忠誠を示す詩や滿淸に對する抵抗の志を歌う詩が數多い事實から判斷できる。詩人が故意に自作にも珍らしい五言排律の詩を、冒頭においたことは、嚴肅なる哀悼の情の表明であって、士大夫としての公的な世界への宣言の詩であった。すなわち、詩中に明確に「小臣」として自身を登場させた事實は、詩人が强く意識して、公の世界に向って自己を表明したものにほかならないのであって、以下論を進めるように、顧炎武の詩における必然であり、詩における自我の標榜ではないのかと思われる。

同年に作られた七絕「千官」にいう。

武帝求仙一上天　　武帝仙を求めて一たび天に上る
茂陵遺事只虛傳　　茂陵の遺事只だ虛しく傳ふのみ

千官白服皆臣子　千官の白服するは皆臣子なるも
孰似蘇生北海邊　孰か蘇生の北海の邊なるに似ん

この詩で、顧炎武は自ずからを「蘇生」すなわち蘇武に比している。「多くの官吏が白い喪服を着て、彼らはみな臣下であるには相違ないが、果して匈奴へ使いして抑留されても武帝への忠節を盡した蘇武ほどのものがいるだろうか。」と、崇禎帝が自ずから社稷に殉じたにも拘らず、群臣の從う者が甚だ少なく、ただ喪に服しているだけの者が多いことに對して、詩人は憤りを發し、自分は決してそのような臣下ではないと表明しているのではないか。そして、顧炎武は明朝の遺臣としての生涯をこの時より始めたのである。

一六四四年五月、北京を占領した清軍は、陝西に逃亡した李自成を追うとともに、南方に擁立された明の諸王を討伐するために江南地方へ進軍を開始した。この時期、『揚州十日記』、『嘉定屠城紀略』等の文獻が示すごとく、江南地方の人々はとりわけ戰亂の影響を手ひどく受けた。當時、漢民族の反清鬪爭は極めて熾烈で、とくに江蘇・浙江一帶の抵抗が最も激烈であった。清軍が揚州を攻略する時、史可法の部下は盡く戰死するほどであった。

この年、顧炎武は崑山令楊永言の推薦により南京政府の兵部司務に任ぜられる。南京政府は、この國家危急の時期に及んでもなお從來の黨派爭いが持ちこまれている狀態で、衆心一致して外敵に當るどころか、揚州の史可法を見殺しにするような、各派が内部で黨爭する全くの腐敗政權であった。そこへ清軍が押し寄せると、ひとたまりなく南京政府は崩壞し、福王朱由松は捕えられ殺される。南都に入京するまでの顧炎武は、「感事」詩九首に見られるごとく、失われた北方の山河を悲痛な調子で歌いながら、一方では福王政權に對して素朴な希望を持ち「大將」(15)

史可法を讃える詩を作る。

一六四五年四月、顧炎武は南都に至り、抗戰準備の慌しい中でも、古都南京に纏はる感慨を、次の詩「金陵雜詩」之一に託する。

江月懸孤影　江月は孤影を懸け
還窺李白樓　還た李白の樓を窺ふ
詩人長不作　詩人長く作らず
千載尙風流　千載尙ほ風流あり
塢壁三山古　塢壁は三山に古り
池臺六代幽　池臺に六代幽なり
長安佳麗日　長安佳麗の日
夢繞帝王州　夢は繞る帝王の州

この詩、徐嘉の「顧亭林先生詩箋注」では、尾聯の出典として、謝朓「入朝曲」の「江南佳麗地、金陵帝王州」を指摘する。この年五月に南京が落城するまでに作った「京口卽事」二首・「京闕篇」一首・「金陵雜詩」五首・「千里」一首の詩のほとんどが、顧炎武のいう「天下中興を思ふ」詩であるが、「金陵雜詩」五連作の第一首に、自己の情から發した「夢」を歌い、詩人の內なる性情を流露するのであった。

一六四五年五月十五日、南京が陷落して後、顧炎武は蘇州に從軍する。六月、故鄕に歸り崑山の人々が起した武

裝鬪爭に參加する。この地方の人民は、辮髮の强制、清の官吏や兵隊の掠奪暴行に反抗して、頑强な反清愛國の戰いに立ち上るが、殘酷で血腥い彈壓を加えられる。次に擧げる「秋山」と題する詩は、顧亭林詩の中で特に有名な詩であり、當時の江陰、嘉定、崑山三縣の人民の勇敢な鬪爭、壯烈な戰いぶりを生き生きと描いたものである。このような詩作は、顧炎武が命を賭して現實の抗清鬪爭に參加した必然的結果であろう。「秋山」之一――

秋山復秋山　秋山復た秋山
秋雨連山殷　秋雨山に連なりて殷んなり
昨日戰江口　昨日江口に戰ひ
今日戰山邊　今日山邊に戰ふ
己聞右甄潰　己に聞く右甄の潰えたるを
復見左拒殘　復た見る左拒の殘れたるを
旌旗埋地中　旌旗地中に埋め
梯衝舞城端　梯衝城端に舞ふ
一朝長平敗　一朝にして長平の敗のごとく
伏尸徧岡巒　伏尸岡巒に徧し
胡裝三百舸　胡裝せる三百舸
舸舸好紅顏　舸舸に好紅顏あり

吳口擁橐駞　吳口に橐駞を擁し
鳴笳入燕關　笳を鳴らして燕關より入る
昔時鄢郢人　昔時鄢郢の人
猶在城南間　猶ほ城南の間にあり

この詩は、顧炎武を含む抗清に奮戰する人々と、抵抗もむなしく陷落した城市の悲慘な情況を描いている。しかも、最終聯に自注を付けて、「戰國策」（卷十三齊六）に、雍門司馬、齊王に謂ひて曰はく、鄢郢の大夫、秦の爲にするを欲せずして、城南の下に在る者、百を以て數ふ。」と示し、詩人は自己を「鄢郢人」に見たてて、「昔、楚國の亡びた後、楚の舊都鄢と郢の城南には、秦朝に心を寄せぬ人々が潜んでいたように、そんな人が今も猶お城南に潜在することを忘れないでほしい。」と、詩人自身の强い抗清の決意をこめている。

四月末（舊曆）の揚州陷落以後、五月十五日南京、七月六日崑山、十四日常熟、八月二十一日に江陰と、つぎつぎに江南各地の城市が陷落していった。顧炎武や歸莊らの文人も、抗清鬪爭に參加するが、漢奸となった中國兵を率いて强大となった清軍の前にはどうすることも出來なかった。かくて殘忍な虐殺と恐怖の掠奪に遭いながらも、顧炎武は何とか身を以て免れることができた。しかし、崑山落城のとき、顧炎武の生母何氏は清兵に右腕を切り落され、四弟顧纘、五弟顧繩も戰死虐殺され、さらに纘の妻朱氏は自殺を計ったが、生命だけはとりとめた。そして、常熟も陷落し、その報を聞いた顧炎武の養母王氏は絕食して國に殉じた。

この時から十五年後（一六五九）、北遊中の顧炎武は「寄弟紓及友人江南」の詩で、當時のありさまを回想して

いる。その第三首――

自昔遘難初　昔難に遘ふの初めより
城邑遭屠割　城邑屠割に遭ふ
幾同趙卒坑　幾んど趙卒の坑せられしと同じく
獨此一人活　獨り此の一人のみ活く
既偸須臾生　既に偸む須臾の生
詎敢辭播越　詎んぞ敢へて播越するを辭せんや
十年四五遵　十年に四五たび遵り
今復客天末　今復た天末に客たり
田園已侵幷　田園已に侵幷せられ
書卷亦剽奪　書卷も亦た剽奪せらる
尚虞陷微文　尚ほ虞る微文に陷らんことを
雉羅不自脫　雉は羅を自らは脫せず
却喜對山川　却って山川に對するを喜び
壯懐稍開豁　壯懐稍く開豁たり
秉心在忠信　秉心は忠信に在るも

持身類迂闊　持身に迂闊に類たり
朋友多相憐　朋友多く相ひ憐れむも
此志貫窮達　此の志窮達を貫かん
雖鄰河伯居　鄰は河伯の居なりと雖も
未肯求呴沫　未だ肯へて呴沫を求めず
出國每徒行　出國は每に徒にて行き
花時猶衣褐　花の時も猶ほ衣は褐
以此報知交　此れを以て知交に報ず
無爲久惻怛　無爲にして久しく惻怛す

この詩の一、二聯で、十五年前のあの苦難の日日、清兵の屠殺の手から命からがら逃れた「獨り此の一人のみ活」きた自分であることを回想する。三聯に徐嘉が、崇禎帝に殉じた施邦曜（一五八五―一六四四）の言を引いて、「城陷つ、（邦曜）長安門に趨き、帝の崩ずるを聞き、慟哭して曰はく、君社稷に殉ぜり。臣子偸生すべけんや。と。」（明史卷二百六十五）と注しているごとく、顧炎武もまた殉難していたやも知れぬ。しかし、崑山の戰亂以後、生を偸んできたという顧炎武は、いたずらに生きながらえようとしたわけではなかった。それは、「獨此一人活」という孤獨殘存の情を懷きながらの遺民の生涯であり、また再興を願って同志を索め續ける放浪の人生であった。「秋山」第二首の末句で「存亡今より始まる」と宣言した顧炎武は、まさにこの時から放浪の人生を開始したので

ある。

四

顧炎武の養母王氏は[16]絶食して國に殉じた。それから二年後、王氏の遺骸を崑山の顧氏の正式な墓所にようやく埋葬した折に、顧炎武は王氏のために「先妣王碩人行狀」を草したのであるが、王氏の遺言を記錄することを忘れなかった。遺言に曰はく。

我婦人と雖も、身は國恩を受く。國と俱に亡ぶるは義なり。汝、異國の臣子と爲る無かれ。世世の國恩に負く無くんば、則ち吾以て地下に瞑すべし。

殉難の機を免れ、生き殘った顧炎武のなすべきことは、この養母の遺言を遵守して生き、出來ることならば自分の「經世致用」の學問を後世に傳えるべく抗清の意志を貫くことであった。養母王氏は死亡したが、その遺骸は辛うじて顧炎武の手にある。しかし、これを埋葬するにも、清兵が横行するので出來ない。一六四五年九月以來、その遺骸と行を共にしていた詩人は、「防墓の處を求めんと欲するも、戈甲江潯に滿つ」と歌って（表哀詩）、埋葬の地を捜しあぐねていたが、やっと十二月十九日、假葬にこぎ着ける。その折の詩「十二月十九日奉先妣藁葬」は、次のごとく歌っている。

婁縣百里內　婁縣　百里の內
胡兵過如織　胡兵過ぐること織るが如し

土人每夜行　土人　毎夜行き
冬深月初黑　冬深くして月初めて黑し
扶柩已南來　柩を扶けて已に南に來たり
幸至先人域　幸いに先人の域に至れり
合葬亦其時　合葬も亦た其の時なるも
倉卒未可得　倉卒として未だ得べからず
停車就道右　車を停めて道右に就き
丘也聞日食　丘や　日食を聞く
魏魄依祖考　魏魄は祖考に依り
卽此幽宮側　此の幽宮の側に卽く
三年卜天道　三年　天道を卜し
墓櫝茂以直　墓櫝　茂りて以て直し
黽勉臣子心　黽勉す　臣子の心
有懷亦焉極　懷ふ有るも亦た焉ぞ極まらん
悲風下高原　悲風　高原より下り
父老爲哀惻　父老　爲に哀惻す

其旁可萬家　其の旁　萬家ばかり
此意無人識　此の意　人の識る無し

この詩第十五句の「臣子心」とは、詩人の心であり、これは先に引いた王氏の遺言「汝、異國の臣子と爲る無かれ。」を意識したものである。故に、「臣子の心を黽勉す」とは、明朝の臣下として報國の至誠に燃えることである。この詩のごとく、「臣子」として明確に詩人自身を表出させる詩作が顧炎武には多いのである。

これまで引用した詩は、顧炎武自身が何らかの形で詩中に直接登場するものである。ただし、詩中で「我」「吾」等一人稱代名詞を用いるものは、自己を指すことあまりにも明白であり直截的であって、説明的散文的であるが故に、顧炎武が詩の表現に工夫をこらした獨創的な點とは認めがたい。本稿では取り上げないことにする。

さて、王氏の死後三十年に近いその命日に、顧炎武は「先妣忌日」七律を作る。

風木凋零已過時　風木の凋零　已に時を過ぎ
一經猶得備人師　一經猶ほ得たり人の師に備ふるを
聞絲欲下劉殿泣　絲を聞きて下さんと欲す劉殿の泣
執卷方知孟母慈　卷を執りて方に知る孟母の慈
秋雨秀連中野蔚　秋雨の秀は中野の蔚に連なり
夕陽光起北園葵　夕陽の光は北園の葵を起こす
無窮明發千年慨　窮まり無し明發千年の慨

豈獨杯**巵**忌日思　　豈に獨り杯**巵**もて忌日に思ふのみならんや

この詩では、頷聯に「南齊書」劉瓛傳の「母沒して十餘年、絲竹の聲を聞く毎に、未だ嘗つて欷歔流涕せずんばあらず。」と自注していることから考えれば、劉瓛に詩人自身を象徴させていると思われる。「臣子」ほど明確ではないが、自己を象徴させ詩中に自畫像を表出することは、顧炎武が數多く用いた手法と呼ぶべきものとなっている。

かかる自己象徴の表現手法は、すでに引用した幾つかの詩中にも見え、「小臣」「蘇生」「鄢郢人」「此一人」「臣子」「劉瓛」等のことばは、詩人の自畫像である。このような象徴的手法で、詩人自身の形象を表出する詩作は、顧亭林詩中約六十首中[17]にあって多きを占める。因みに言えば、その頻出の割合も年によって高い數値を示す。例えば、一六四四年の詩十首中では。「大行哀詩」の「小臣」、「千官」其一の「蘇生」、其二の「稽侍中」の三首を指摘できる。翌一六四五年の十四首中では、少なくとも五首を指摘できよう。[18]晩年の一六八〇年に到っては、八首詩作しているが、次にあげる連作「悼亡」五首の中三首もその好例である。「悼亡」五絶其之一——

獨坐寒窗望藁砧。　　獨り寒窗に坐して藁砧を望む
宜言偕老記初心　　宜しく偕に老いんと言ひて初心を記すべし
誰知游子天涯別　　誰か知らん游子天涯に別れ
一任閨蕪日夜深　　一に閨蕪の日夜深かまるに任す

連作詩「悼亡」は、妻が卿里で亡くなったと聞くが、遠く山西に居た顧炎武が哀悼のために送り寄せたものであ

る。この詩、起句の「藁砧」とは、藁打ち台のことであるが、徐嘉が「夫を喩ふるなり。」と注するごとく、妻が夫をいふ隠語である。「夫」とは、「游子」となって天涯を旅する顧炎武を指す。其之二では、

廿年作客向邊陲　廿年客と作り邊陲に向ひ
坐歎蘭枯柳亦衰　坐ろに歎ず　蘭枯れ柳も亦た衰へたるを
傳說故園荆棘長　傳へて說ふ　故園荆棘長ぜりと
此生能得首丘時　此の生能く丘に首する時を得んや

この詩では、起句「廿年客と作り……」の「客」が顧炎武の姿であること明白である。同じく其之四を擧げる。

貞姑馬鬣在江村　貞姑の馬鬣　江村に在り
送汝黃泉六歲孫　汝を黃泉に送る六歲の孫
地下相煩告公姥　地下に相煩はす公姥に告ぐることを
遺民猶有一人存　遺民　猶ほ一人の存する有りと

この詩、結句の「遺民」とは、詩人自身であること言うまでもない。これらの「悼亡」連作を讀むとき、顧炎武が詩人として何よりも表現したかったのは、自分自身の姿ではなかったかと思われるほどである。それは、漱石が述べた「藝術は自己の表現に始まって自己の表現に終わるものである。自己を表現する苦しみは自己を鞭撻する苦しみである。[19]」という藝術觀に似ている。顧炎武の詩、初期から晩年の作まで一貫しているのは、自我を形象化していることであろう。そして、詩に表出される自畫像は、「臣子」「鄢郢人」等の言葉で示される初期の詩のごと

く、同志の存在を予想させる群像の形象から、この「悼亡」詩に端的に表出される天涯を放浪する孤獨な旅人、遺民という獨立の形象に變化するのである。

ところで、沈德潛（一六七二―一七六九）は、『明詩別裁集』巻十一に、顧絳の名で炎武の詩十五首を選し、次のごとく評價する。

詞は必ず己より出で、事は必ず精當なり。風霜の氣、松柏の質、兩者兼ね有す。詩の品に就きて論ずれば、亦た第二流人と作るを肯へんぜず。

沈德潛は、すでに顧亭林詩について、「詞必己出、事必精當」と指摘し、さらに、「詩の品」つまり藝術面での等級づけとしても、「亦不肯作第二流人」と認めたのである。沈德潛は、清代における格調派の最右翼であるが、性情を主んじた顧炎武の詩を高く評價したわけである。「詞必己出」という評語は、沈德潛が顧亭林詩の表現の獨創性に氣付いていたことを暗示する。そのことを裏付けるものとして、沈德潛が選出した顧氏の詩は、やはり「詞は必ず己より出」た獨創性を有する作が多い。一例として、「與江南諸子別」七律を擧げる。

絶塞飄零苦著書　絶塞に飄零して書を著はすに苦しむ
塢來行李問何如　塢來の行李　何如を問ふ
雲生岱北天多雨　雲は岱北に生じて天多く雨ふる
水決淮壖地上魚　水は淮壖を決して地上に魚あり
濁酒不忘千載上　濁酒に忘れず千載の上

荒雞猶唱二更餘　荒雞猶ほ唱ふ　二更の餘
諸公莫效王尼歎　諸公效ふ莫かれ　王尼の歎き
隨處容身足草廬　隨處身を容るるに草廬足れり

顧炎武は抗清の同志を求めての旅を、この時（一六五九）まで、すでに十年以上續けていた。まさに「飄零」の旅の人生であった。「諸君は、晉の王尼が車上に起居して『滄海横流して、處處安んぜず』（自注：『晉書』王尼傳）と嘆くのを倣うな。何處へ行こうとも身を容れるに足る草の廬は存在する。」と歌っているが、この發言はそのまま自己に向けられたものであろう。

五

次に、この時期の旅上の詩に表われる詩人の自畫像が、明朝滅亡當時の抗戰意識に燃えて自己を直截に「臣子」等と表明したのとは樣相を異にした色合いを帶びてくることを明らかにしたい。明朝滅亡後十五年、一六五九年という年は、桂王朱由榔が吳三桂に追われてビルマに逃れた年であるが、一方では鄭成功・張煌言等が反攻して、江蘇の鎭江と對岸の瓜洲で勝利を收め、南京攻略を開始した（六月）。だが、それも失敗に終り七月末には崇明島、さらにその後臺灣に退卻する。顧炎武が北方から揚州まで南下したのは、そうした明の遺民の反攻に對應して、自らもそれに參加する目的であったのであろう。しかし、その志も鄭成功軍の敗退で挫折する。その折の詩作「秋雨」五古を擧げ、詩に表出される自我について檢討する。

生無一錐土　生くるに一錐の土無きも
常有四海心　常に四海の心有り
流轉三數年　流轉　三數年
不得歸園林　園林に歸るを得ず
蹠地每塗淖　地を蹠めば每に塗淖
闕天久曀陰　天を闕えば久しく曀陰す
尙冀異州賢　尙ほ異州の賢を冀ひ
山川恣搜尋　山川　恣ままに搜尋す
秋雨合淮泗　秋雨淮泗を合し
一望無高深　一望するも高深無し
眼中隔泰山　眼中　泰山を隔つ
斧柯未能任　斧柯未だ任ふる能はず
車沒斷崖底　車は斷崖の底に沒し
路轉崇岡岑　路は崇岡の岑に轉ず
客子何所之　客子　何れに之く所ぞ
停驂且長吟　驂を止めて且く長吟す

夸父念西渴　夸父には西渴を念ひ
精衞憐東沈　精衞には東沈を憐れむ
何以解吾懷　何を以て吾が懷ひを解かん
嗣宗有遺音　嗣宗には遺音あり

この詩では、詩人は「客子」として登場する。「旅人はこれから何處へ行くというのだろうか。馬を止めて且らく長吟する。」と、今から差し當って行く目的地を失った放浪の人として描かれている。長年來、「異州の賢」すなわち抗清の同志を求めて旅を續けて來た詩人の挫折の心情が醸し出されている。

顧炎武は放浪の人生を長く送っただけに、旅の作が數多い。その旅上の詩は、旅先の山河を歌うにしても、やはり何らかの形で詩人自身を象徴させる表現を多く用いる。そして、それは詩に表われた詩人の分身・影のように、その本體の形象を寫す。詩中に表現されたそのイメージは、詩人の內面の變化を自己が意識するかしないかに關わらず表出する。

「北游以前の顧炎武」[20]は、已に述べたように、抗清鬪爭に參加する同志の一人として描かれることが多かったが、時が經過するとともに、清朝の支配が浸透し平和が回復して來ると、江南の人心は、抗清鬪爭の持續を主張する顧炎武を入れなくなったのであろう。また、全祖望によれば、顧炎武の本籍は江南にあるとはいえ、少年時代から「顧怪」の名で呼ばれた性癖は、吳會の人々と非常に異なっていた。そのために鄉里に容れられなかったという。[21]清朝は支配の貫徹のために、抗清の殘黨狩りや彈壓を進め、それ故、故鄉に居られなくなった顧炎武は江南各

地を轉轉とする。その出立の時の詩「將有遠行作時猶全越」（一六四八年作）を讀めば、

去秋闊大海　去秋大海を闊ひ
今多浮五湖　今多五湖に浮かぶ
長歎天地間　長歎す　天地の間
人區日榛蕪　人區　日に榛蕪するを
出門多蛇虎　門を出づれば蛇虎多し
局促守一隅　局促　一隅を守る
夢想在中原　夢に想ふ　中原に在りて
河山不崎嶇　河山は崎嶇ならず
朝馳灑潤宅　朝に灑潤の宅に馳せ
夕宿殽函都　夕べに殽函の都に宿することを
神明運四極　神明（こころ）は四極を運るに
反以形骸拘　反つて形骸を以て拘せらる
收身蓬艾中　身を蓬艾の中に收め
所之若窮途　之く所　窮途の若し
杖策當獨行　策を杖つきて當に獨行すべし

未敢憚羈孤。　未だ敢へて羈孤となるを憚らず
願登廣阿城　願はくは廣阿城に登り
一覽輿地圖　輿地圖を一覽せん
回首八駿遙　首を回らせば八駿遙かなり
悵然臨交衢　悵然として交衢に臨む

ここで留意すべきは「夢想在中原」の句以下の詩句である。この時すでに顧炎武には、江南を脱出して中原に復歸する熱望があったことが明白である。さらに、その決意も「杖策當獨行　未敢憚羈孤」と、孤獨な旅人となることも辭さないと述べているが、それは獨行放浪の旅人の形象である。そして、中原への出立は、陸恩殺害事件[22]を契機としての入獄（一六五五）、翌年春出獄してまた二年後（一六五七）の春、敢行される。實に、この詩作の時以來十年近く江南地方を放浪し、その間六度も孝陵に謁して後、江南を離れるのである。北游以前の詩人は、身を常に危險に曝しながら、抗清運動と同志を求めて旅する身であり、その志が遂げられず悲歎にくれながらも「久客仍ほ流轉し、愁人獨り遠征す」（旅中）と我身を詩に歌う。

ところが、北游への旅上に登っての翌年（一六五八）、濟南を過ぎ、もう北京に近くなったときの七律「自笑」では、孤獨な旅人としての望鄉の念を、屈折した氣持ながらもおかしみを持って、次のごとく歌う。

自笑今年未得歸　自ずから笑ふ今年未だ歸るを得ざることを
酒樽詩卷欲何依　酒樽と詩卷は何こに依らんと欲す

呼僮向曉牽長轡　僮を呼びて曉に向んとして長轡を牽かしめ
覓嫗先冬綻故衣　嫗を覓めて冬に先だちて故衣を綻はしむ
黃耳不來江表信　黃耳は來たさず江表の信
白頭終念故山薇　白頭終に念ふ故山の薇
無因化作隨陽雁　化して陽に隨ふの雁と作り
一逐西風笠澤飛　一へに西風を逐ひて笠澤に飛ぶに因無し

この詩の尾聯には、「陽に隨って飛び渡る雁に變身して、秋の西風が吹くのを逐って江南の笠澤に飛びたいが、そのすべもない。」と結ぶごとく、雁に變身して自由に故郷へ飛び歸りたい氣持を、「自ら笑」いながら歌っている。ここでは、詩人は自由に空を飛ぶ雁に自分を象徵させようとしている。すなわち、顧炎武は、自己を鳥に託して詩中に形象化しようとするが、この空を飛ぶことが出來る鳥の形象が表出されるのは、北游以後の詩である。次の五律「薊州」では、より明確にこれを指摘できる。

北上漁陽道　北のかた漁陽の道に上れば
陰風倍慘悽　陰風倍ます慘悽たり
窮魚浮淀白　窮魚は淀みに浮いて白く
孽鳥向林低　孽鳥は林に向ひて低し
故壘餘安史　故壘　安史を餘し

居人半霄奚　居人　霄奚半ばなり
停驂聊一問　驂を停めて聊か一問す
幾日到遼西　幾日か遼西に到らんと

この詩第四句の「孽鳥」に、詩人自注して、「戰國策（卷十七楚四）、雁東方より來たる。更羸、虚發を以て之を下し、曰はく、『此れ孽なり』と。註、孽とは身に隱痛あること、孽子の如きことを謂ふなり。」を引くことから、「孽鳥」が詩人の象徴であることは、言うまでもない。この詩の作られた薊州は、今の天津市の最北部であり、顧炎武の夢想する帝都の所在する關中はまだ遠い。これ以後、五年近くの間、華北、山東を旅し、その間二度江南に歸るが、すぐ北方へ引き返す。そして、康熙元年（一六六二）に至って、やっと關中への旅、すなわち華北から山西・陝西への旅へと出立する。年末初めて、華北の「井陘」から山西に入るが、次に擧げる太原あたりで汾河を渡った時に作った五律「一雁」の雁も、おそらくは顧炎武自身の形象であろう。

一雁度汾河　一雁　汾河を度り
河邊積雪多　河邊　積雪多し
水枯清澗曲　水は枯る　清澗の曲
風落介山阿　風は落つ　介山の阿
塞山愁書信　塞山に書信を愁へ
人間畏網羅　人間に網羅を畏る

覆車方有粟　　覆車に方に粟有り
飲啄意如何　　飲啄　意　如何

因みに、雁は中國では漢の蘇武が匈奴に捕われの身となり、雁に手紙を託した故事（『漢書』蘇武傳）から、手紙を運んで來る鳥とされる。顧炎武は、すでに「千官」の詩において、「孰似蘇生北海邊」と自ずからを蘇武に比していることから考えれば、蘇武から雁への連想があって、我身を雁に形象化させたのかも知れぬ。

以後、陝西への旅を續ける顧炎武は、旅上にあっての詩作を多く殘しながら、詩中に自己の姿を何らかの形で表出させることも忘れてはいない。

蒼龍日暮還行雨　　蒼龍日暮れて還た雨行らし
老樹春深更著花　　老樹春深くして更に花を著く　（又酬傳處士次韻）

一雁孤飛日　　一雁　孤飛する日
關河萬里秋　　關河　萬里秋なり　（出雁門關屈趙二生相送至此有賦）

偉節不西行　　偉節西行せざれば
大禍何繇解　　大禍何に繇りて解けん　（赴東其一）

客子從何來　客子何こより來たり
徬徨市邊立　徬徨して市邊に立つ　（赴東其三）

聞絲欲下劉殿泣　絲を聞きて下さんと欲す劉殿の泣
執卷方知孟母慈　卷を執りて方に知る孟母の慈　（先妣忌日）

久客燕代間　久客燕代の間
遂與關山老　遂に關山に老ゆ　（廣昌道中）

太行之西一遺老　太行の西の一遺老
楚國兩龔秦四皓　楚國の兩龔と秦の四皓と　（寄問傅處士土堂山中）

これらの詩句にみえる蒼龍、老樹、一雁、偉節、客子、劉殿、久客、一遺老、兩龔或いは四皓の名詞は、いずれも詩人を象徴させるものである。北游以前のそれと比較するならば、「客子」旅人として形象は生涯にわたって顧炎武の詩中に表われるものであろうが、北游以前の詩に多く表明された「臣子」としての詩人の形象はもう表出されていない。顧炎武詩における自我の表明は、まず旅人として形象化されながらも、北游以前と以後、大きく變化してゆくと見るべきであろう。

晩年一六七七年になって、どうやら顧炎武、旅の人生も終局に向いつつあった。この年までは、華北・山東・山西・陝西の各地方を毎年のようにめぐり歩いているが、一六七七年以後、山東の地を離れ、陝西華陰の王弘撰（一六一三―八二）の下に寓する時が長くなる。そうした關中すなわち陝西定着後の一六七八年の連作に「關中雜詩」五首がある。今、本章の締め括りに、その第一首を擧げて、顧炎武詩發想の獨創性を示す自我の形象化について、その意義を考察したい。

文史生涯拙　文史　生涯拙なく
關河歲月勞　關河に歲月勞す
幽情便水竹　幽情水竹を便とし
逸韻老蓬蒿　逸韻　蓬蒿に老ゆ
獨雁飛常迅　獨雁飛ぶこと常に迅やかに
寒雞宿愈高　寒雞宿すること愈いよ高し
一闚西華頂　一たび西華の頂を闚えば
天下小秋毫　天下は秋毫よりも小なり

この詩、頸聯の「獨雁」「寒雞」が顧炎武自身の孤高の象徴であろうか。この年の初め、清朝は、博學鴻儒科實施の詔を出す。それは、主としては明史編纂の開始のために、人材を廣く集めようとした官吏任用特別試驗であった。海内の優秀な學者を、科擧とは別に、特別に推薦し受驗させて官吏となし、清朝體制下に組み入れる目的もあ

った。清朝に抵抗する人々は、推薦を辭退するが、それは死を覺悟せねばならないものであった。顧炎武も、明史館總裁の葉方藹（？―一六八二）や侍講の韓菼（一六三七―一七〇四）によって推薦されたが、勿論のこと、死を賭してこれを拒絶する。詩人は、行方を晦ますために再び旅に出、決して都に近づこうとしなかったようである（張穆「顧亭林先生年譜」）。しかし、顧炎武の知友の多くは、[23] これを拒むことができず、「良友日零落、悽悽獨無伴」（歳暮）と詩人が歎いたごとく、貳臣とならざるをえなかったのである。「關中雜詩」の中で、「獨雁」に形象化された詩人の姿は、確かに孤高の象徴であるだろうが、それは決して詩人が悦に入った色合いを帶びるものではなく、死を賭して清朝を拒み續けるという、自ずからの生存の意義をこめたものであり、遺民の生涯を全うしようという詩人の不屈の意志を世に示すものである。顧炎武が詩中に形象化した自分の姿は、明末清初という時代に、その時の流れに抗しながらも、自己の意志を生涯にわたって保持し續けようとした自我に忠實なる詩人の必然の結果なのであった。

結　語

顧炎武の學問は、すでに同時代人から高く評價されていたが、それは彼の博學を根底とした「博證」の研究方法によるものである。その「博證」の方法も、顧炎武の獨創性を貴ぶ「貴創」の精神に由來するものであった。顧炎武は、學問においてまた文學において、獨創性を重視する精神を自覺し、また一方では「文は須らく天下に益有るべし」と主張するように、「經世致用」を標榜したのである。

顧炎武の獨創性を重視する精神からは、「詩は必ずしも人々皆は作らず」「文人摹仿の病」の主張が提出されるが、「經世致用」を標榜する精神も、獨創性の自覺と相まって、詩文における時代性を重視する主張の根底となっている。さらに、文學表現において實作面での獨創性重視の要點は、「詩は性情を主とす」「みずから己が意を出だす」ことである。また、詩人はその時代を直視しながら、詩作において「己意」「我」を重視することによって、みずからの文學の獨創性の源泉とした。「己が意を出だす」ということは、顧炎武の詩作にあっては、自己の生を描くことに歸着してゆく。詩中に、自分の放浪の生涯の姿を形象化することが、顧炎武の詩發想の要諦と言えるであろう。天下國家・時代を詩材にとりながら、また自我の存在を決して忘れなかったと言えるのではないか。それは、「詩は是れ心の聲なり。心に違ひて出だすべからず。亦た心に違ひて出だす能はず。」[24]と主張した葉燮（一六二七―一七〇三）のごとく、清初の詩論家の「各自の個性を發揮せんと欲する」[25]思想に共通する側面を有している。

さて、詩中に表出された詩人の形象は、時代から眼を離さず直視し續けた詩人であっただけに、時代の推移の中でその樣相が變化していく。時間的推移の點からいえば、それは初期の詩における「臣子」「小臣」から、晩年の詩に多く現われる「遺民」「遺老」への變化に端的に示されている。さらに、象徵の仕方が、清朝支配體制が浸透するのに對して、韜晦の故であろうが、複雜となっていることも指摘できる。「異州の賢」を索ねて旅する詩人は、その抗清の同志が多く見つかりさえしておれば、決して自己を「一雁」「獨雁」に比することはないはずであろう。「臣子」から「獨雁」への形象化の變樣は、群像の姿から孤獨な旅人・孤高への詩人の自我意識の變化を示すものであろう。また、顧炎武は、生涯を放浪の人生とした詩人であった故に旅する地方によっても、詩中に示された自

我の形象が變化することが指摘できる。北游以前にはほとんど無かった空を自由に飛ぶ鳥とりわけ雁のイメージが形象化される。この點については、興味ある問題が存在するので、その考察は次の機會に待ちたい。

以上要するに、顧炎武の詩は、顧炎武の文學の主張を體現している點が多い。文學表現における獨創性を自覺した詩人は、「みずから已が意を出だす」ために、天下國家のために放浪し續けた自我を形象化することによって、自作の詩にオリジナルを賦與したと言えよう。

註

(1) 『祖國十二詩人』(清華大學中國語文系編　北京開明書店　一九五三)に、十二詩人の一人として、顧炎武を馬漢麟氏が論じている。この論文の初出は、一九五一年九月二十二、三、四日付の「光明日報」である。

(2) 梁啓超『清代學術概論』(臺灣中華書局)九頁。譯は、小野和子氏譯注本(東洋文庫)に據る。

(3) 梁啓超『清代學術概論』が引く『四庫提要』であり、この譯も小野和子譯注『清代學術概論』二十五頁に據る。

(4) 顧炎武が學問において獨創性を重視したことは、「若音學五書、爲一生之獨得、亦足羽翼六經……」(與楊雪臣)、「李君因篤每與予言詩、有獨得者、今頗采之……」(「音學五書後敍」)にあるごとく「獨得」という語を愛用していることも傍證となろう。

(5) 狩野直喜『中國哲學史』五一四頁。

(6) 前掲(1)を古島琴子氏が「愛國詩人顧炎武」という題で翻譯している(「歷史評論」三七號、一九五二年七月)。また、游國恩等主編『中國文學史』(人民文學出版社一九六四年)なども「顧炎武等愛國作家詩文」の小題を掲げる。

(7) 倉田貞美氏『中國近代詩の研究』によれば、革命派知識人では章炳麟、劉師培や柳亞子等、清朝遺老では林紓、楊鍾羲が擧げられる。

(8) 山井湧氏「明末清初思想についての一考察」(東京支那學報　第十一號)に據る。

(9) 佐藤一郎氏「清の詩文」(國學院雜誌　六七―九)。

(10) 『崔東壁遺書』(顧頡剛編訂　上海亞東圖書館)第十

三册「知非集自序」。顧炎武と崔述の關係については、拙稿「崔述の文學思想について」（中國文學論集　第七號）を參照されたい。

（11）R・M・リルケ、佐藤晃一譯『若き詩人への手紙』に、「藝術作品は、必然の結果になるものならば、よいものです。」とある。

（12）『中國文學史』（北京大學中文系文學專門化一九五五集體編著）下册五五七頁。

（13）清水茂氏譯注『顧炎武集』六頁。

（14）前掲（13）七頁。

（15）亭林詩「京口卽事」第二首は、「大將臨江日　匈奴出塞時」で始まる。

（16）明史卷三百三、列女三に「王貞女」の傳がある。

（17）嚴密に決定することが困難な詩も多く存在するので概數をあげる。

（18）「京口卽事」第一首の「祖生」、「帝京篇」の「小臣」、「千里」の「臧洪」、「秋山」第一首の「鄢郢人」、「十二月十九日奉先妣藁葬」の「臣子」である。

（19）夏目漱石「文展と藝術」（『漱石全集』第十一卷）。

（20）岡崎文夫「北游以前の顧炎武」（文化一―二　東北大學）。

（21）全祖望「亭林先生神道表」（鮚埼亭集卷十二）。

（22）歸莊「送顧寧人北遊序」、顧炎武「贈路光祿太平」詩序に據れば、顧氏三代にわたって仕える陸恩という下男がいたが、顧氏と仇敵の間柄である同鄉の豪族葉氏（葉方恒）のもとに、陸恩が寢返った。陸恩は、顧炎武の大逆罪（鄭成功との連絡があること）を告發しようとしたので、顧炎武は口封じのために陸恩を捕え、水に沈めた。葉氏側の陸恩の婿が顧炎武を訴えた。

（23）康熙十八年、博學宏詞科の一等に推された朱彝尊、李因篤は顧炎武の若き友人であり、二等に推された潘耒は顧氏の弟子であった。

（24）葉燮『原詩』（外篇上）

（25）青木正兒『清代文學評論史』（第五章　詩壇の自成一家的思想の擡頭）一一八頁。

※　顧炎武の詩文の引用は、『顧亭林詩文集』（中華書局・一九五九年）、黃汝成『日知錄集釋』（國學基本叢書、上海商務印書館・一九三四年）に據る。